

高度情報社会における判断力を育成する サイバーボランティア支援システムの開発

神戸星城高等学校 席定 大翔
齋藤 翼

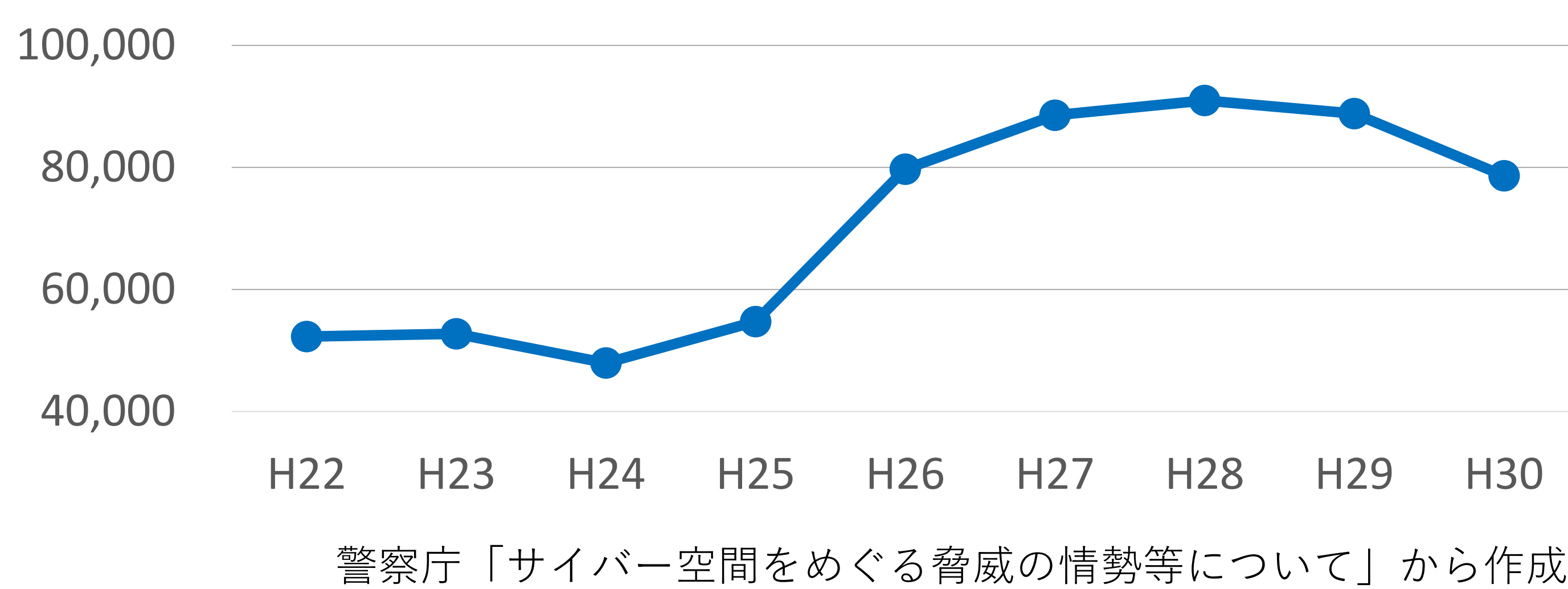
Abstract –要旨–

高度情報社会の進展により、私たちはサイバー空間と密接して生活している。サイバー空間では様々なトラブルを避けるため、法令遵守や情報モラルが求められる。
本研究では私たちが兵庫県高校生サイバーボランティアに参加、インターネット上の違法なサイト、書き込みの捜査活動を通して自らの判断力を育成し、情報モラルの向上に繋げることを目的とした。

Introduction –序論–

インターネット上の個人取引で支払いをめぐるトラブルが頻発するなど、これまでは対面・狭域でしか発生していなかったトラブルが地域や国をまたいで頻発している。
情報の受信者、発信者両方が自分に都合よく情報を捉えるのではなく、疑問点を必ず確認するなどの判断力を養う必要がある。

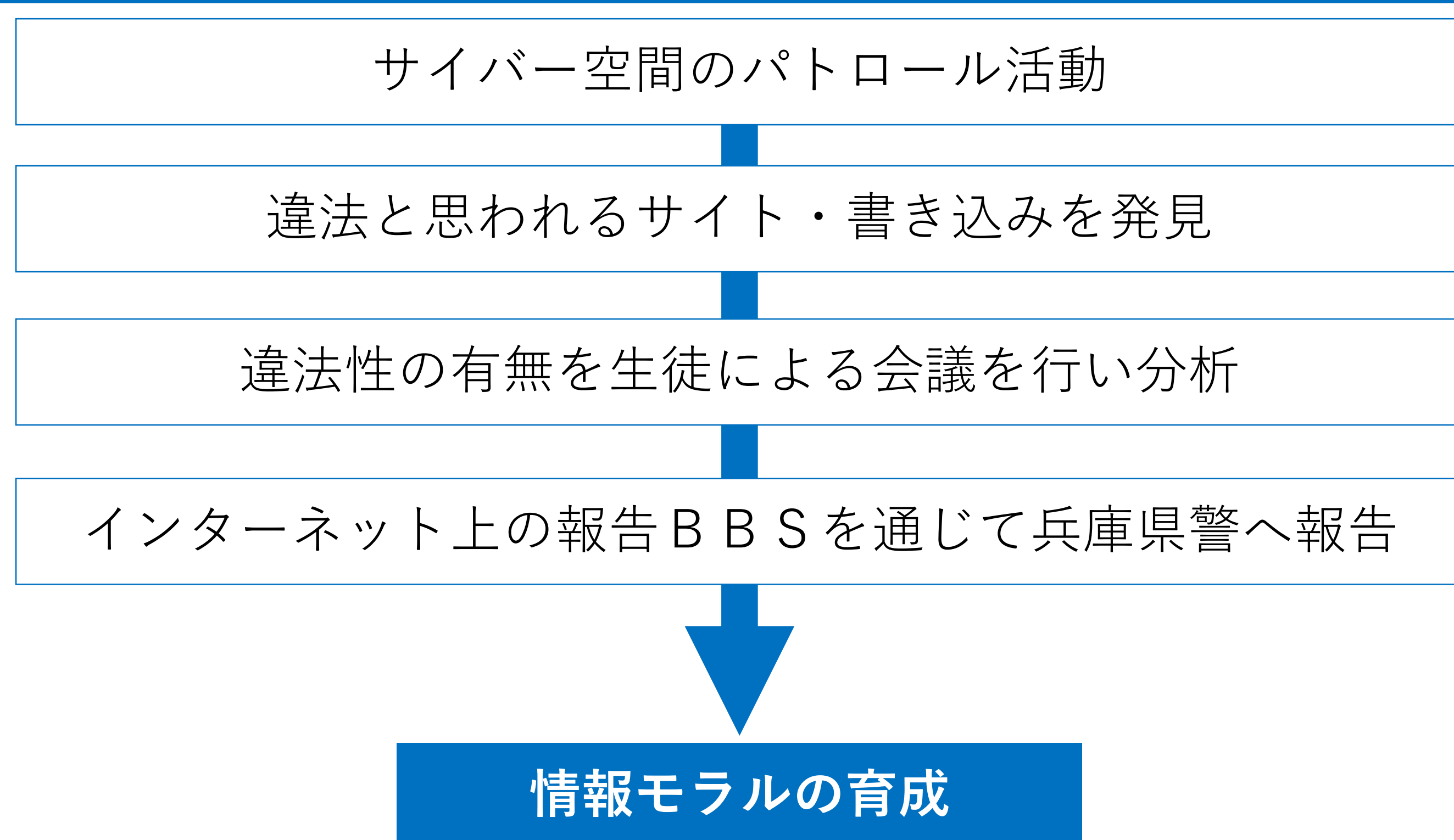
サイバー犯罪相談件数の推移



そこで、本校では違法サイトや違法書き込みを調査し、兵庫県警察本部に報告する全国初の兵庫県高校生サイバーボランティア活動に参加し、実際の体験を通じた判断力、情報モラルの育成に取り組んだ。

Method –方法–

兵庫県高校生サイバーボランティア制度



上記の流れで活動を行い、「サイバー空間で発見したことを現実空間で報告する」過程を通して、サイバー空間と現実空間の乖離がなくなり、現実社会に即した情報モラルを育成していくことができる考えた。

さらに、兵庫県以外での活動を啓発するために、研究の趣旨を説明するチラシ、警察担当者用マニュアル、システムをインストールできるDVD、コンソーシアム組織図の4点をパッケージ化した。
活動の効果は、情報モラルに対する意識変化を質問紙にて調査し、分析した。

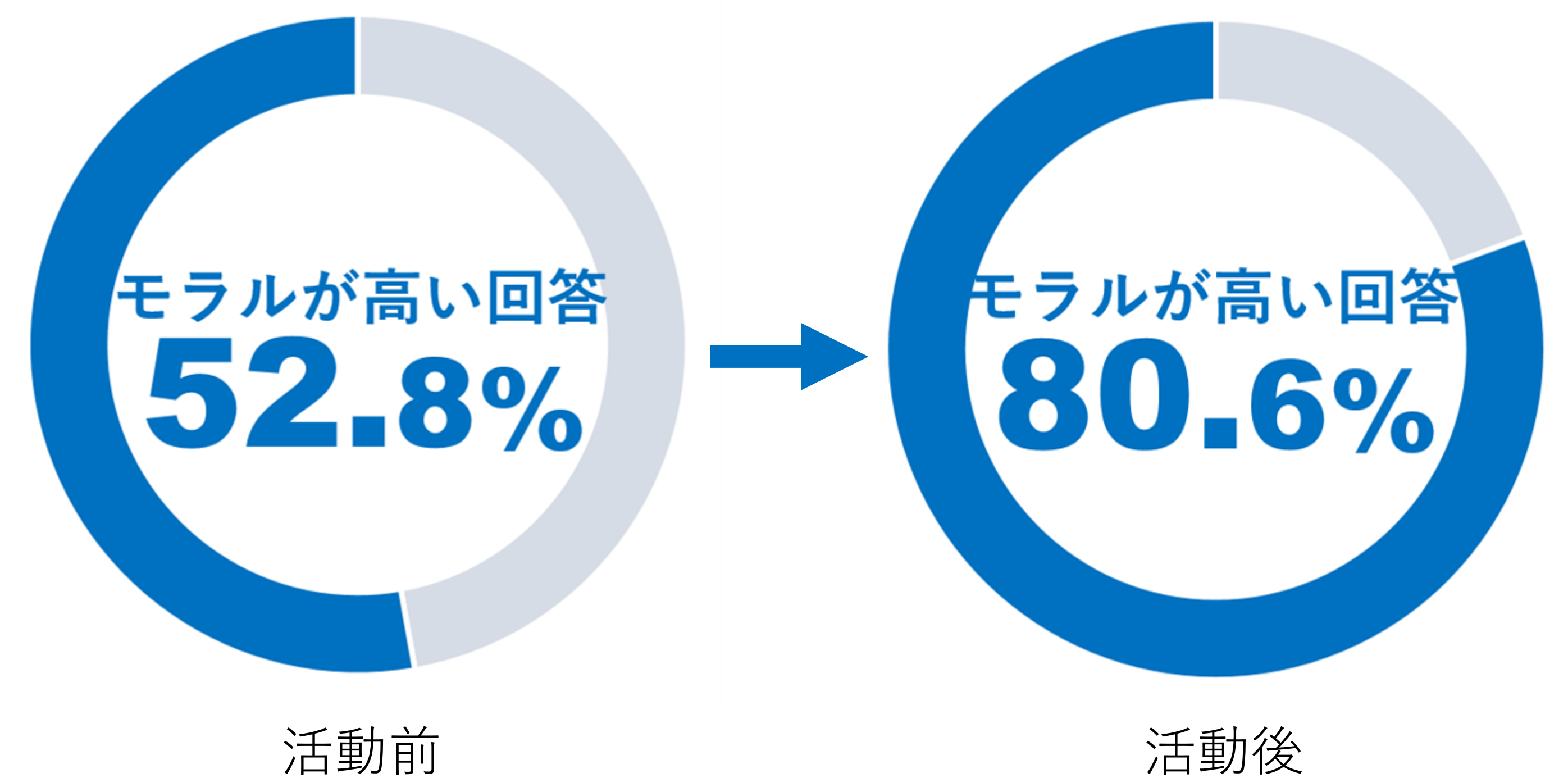


作成した支援パッケージ

Result –結果–

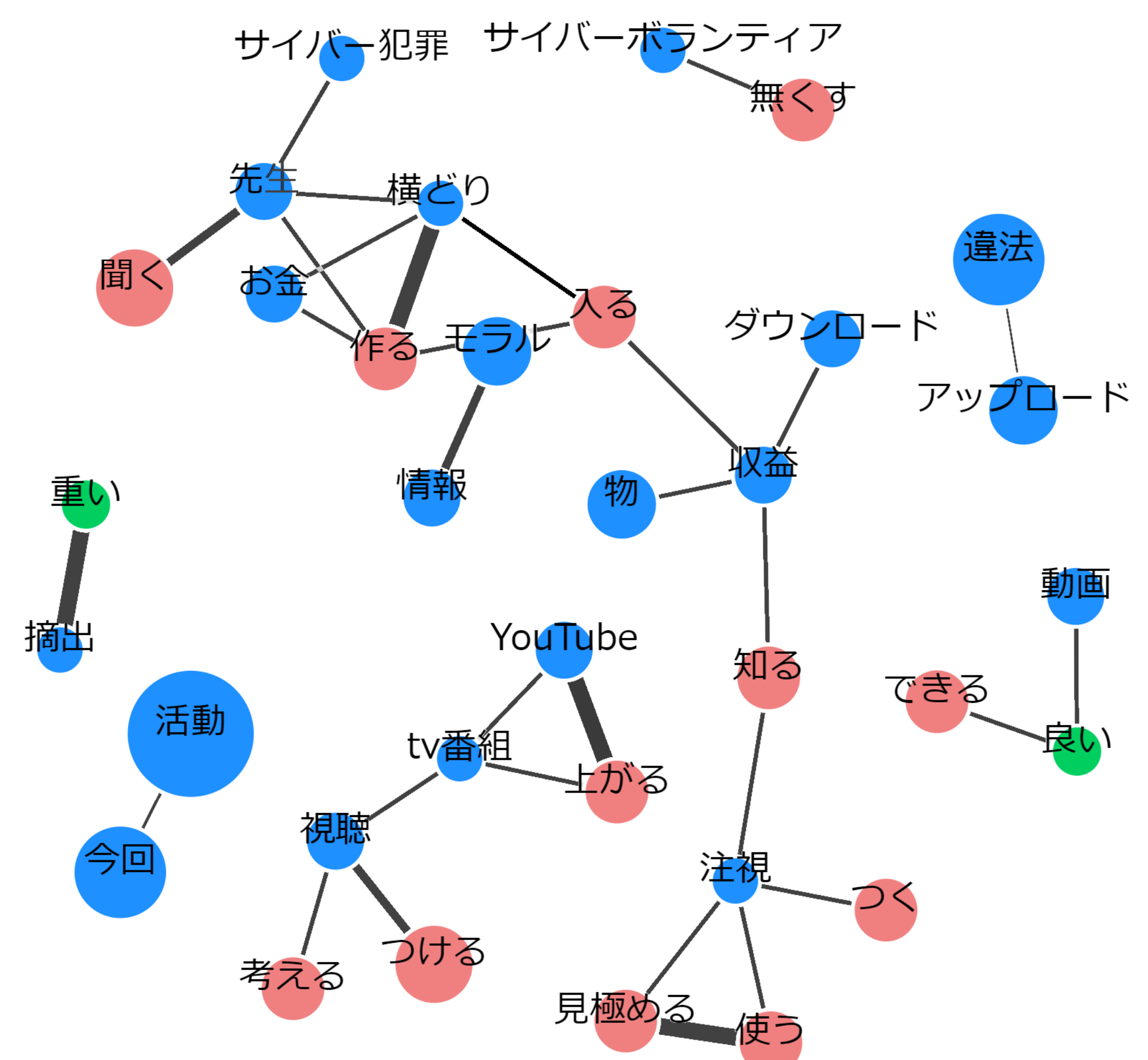
本調査では、事前調査と事後調査を行うことで活動前後の意識の変容を分析することを目的とした。
調査対象は、高校生サイバーボランティアの活動に参加しているコンピュータ部員20名とした。
調査方法は、調査対象に対して質問紙を配布して行った。
第1回調査：平成30年1月25日（定量データ）
第2回調査：令和2年2月22日（定量データ・定性データ）

情報モラルについてのアンケート集計



本調査では、事前調査と事後調査を行うことで活動前後の意識の変容を分析することを目的とした。
活動の開始段階では、情報モラルに対する意識が低く、日常生活における防犯意識も低い回答が約47%を占めていたが、活動後には約80%が情報モラルが高いと言える回答をしており、活動を通して情報モラルが高まったと分析できる。
また、定性データとして収集した活動の感想をテキストマイニングの手法を活用して分析した。

共起ネットワーク図



感想からは、警察への報告を行う上での重要性を考えて報告内容を決定しているなどの判断力や情報モラルに対する意識の高まりを示す記述が見られた。例えば「見極める」と「使う」が強い繋がりがあることから、これからの生活においてサイバー犯罪に対して注意を促すことが出来たと分析できる。また、「作る」と「横どり」にも強い繋がりがあり、著作権物を悪用するサイバー犯罪を許さない気持ちが高まったとも分析できる。

Conclusions –結論–

活動前後で意識に大きな変化が見られ、モラルが向上したという結果を得られたことから、この活動が情報モラルの向上に効果的だと分析できる。簡単な作業で、情報モラルの向上に効果があるこの活動を全国に啓発していき、より多くの方にサイバー犯罪が身近なものだという認識を持ってもらえるようにしたい。